青年期における自己変容に伴う葛藤の発達的变化

—自己変容のメリット・デメリットの予期から生じる葛藤に着目して—
千島雄太¹

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科)

キーワード：自己変容，葛藤，発達的变化

Developmental change of mental conflicts following self-change during adolescence

: Focusing on mental conflicts caused by expectations of benefits and costs of self-change

Yuta CHISHIMA¹

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)

Key Words: Self-change, Mental conflict, Developmental change

目 的

青年期には今の自分を変えたいという気持ちが強まる一方で、変えることができずに悩みを深めやすいことが指摘されている (Polivy & Herman, 2000)。本研究は Kiecolt (1994) の理論モデルを参考に、自己変容の予期に伴う葛藤に着目する。堀之内 (1997) や Miller & Rollnick (2002) は、自己変容を望む際には葛藤を抱きやすく、変わることの利益とコストを予期し、葛藤を解決することが、変容の実現への鍵となることを指摘している。そこで本研究は、自己変容に伴う葛藤状態の様相について、葛藤理論 (Lewin, 1935) を援用し、青年期の発達の観点から明らかにする。

方 法

調査対象者 関東圏内の2校の公立中学校の1-3年生525名 (平均13.72歳, $SD=0.91$)、2校の公立高校の1-2年生284名 (平均16.37歳, $SD=0.60$)、2校の国立大学、1校の私立大学、1校の専門学校の1-4年生353名 (平均20.32歳, $SD=1.25$) 計1162名 (男性555名, 女性603名, 不明4名) を対象とした。

調査手続き 2013年1-2月にホームルームや授業時間を利用して、以下の内容の質問紙を配布し、その場で回収を行った。

調査項目 1. 自己変容のメリット予期: 2012年10-11月に大学生91名を対象に行った予備調査の結果に基づいて項目を作成した。(自己変容・現状維持) × (メリット・デメリット) の4つを尋ねる23項目である。2. 自己変容に対する志向性 (千島, 2013): 今の自分を変えたいという気持ちについて尋ねる5項目である。3. 自己変容の実現 (千島, 2013): 自己変容がどの程度実現されているかを尋ねる6項目である。4. 自己変容の重要性の認識: 自己変容が自分にとってどの程度重要だと思うかを尋ねる3項目を独自に作成して使用した。5. 内省 (佐藤・落合, 1995) 6. 自尊感情 (山成・松井・山本, 1982)

結 果

自己変容のメリット予期の4得点を標準化し、非階層クラス分析 (K-means 法) によって、解釈可能性から5群に分類したところ、葛藤を表すクラスが抽出された (Figure1)。

次に、3つの学校段階と葛藤5群のクロス集計表を作成し、

χ^2 分析を行った ($\chi^2=91.60, p<.001$)。残差分析の結果、中学生では“無関心群”と“現状維持メリット予期群”，高校生では“回避—回避葛藤群”，大学生・専門学校生では“自己変容メリット予期群”，“接近—接近葛藤群”が有意に多かった (Table1)。

さらに、学校段階を要因とした一要因分散分析によって、その他の得点を比較した。その結果、自己変容に対する志向性得点は、高校生で中学校と大学生・専門学校生よりも高かった ($F=18.92, p<.001$)。自己変容の実現得点と自尊感情得点は、高校生で中学生と大学生・専門学校生よりも低かった ($F=15.48, p<.001$; $F=22.02, p<.001$)。自己変容の重要度の認識得点は、学校段階が上がるほど高く ($F=49.02, p<.001$)、内省得点は、大学生・専門学校生で中学生と高校生よりも高かった ($F=53.68, p<.001$)。

考 察

クラス分析によって、自己変容や現状維持のメリットを予期している群だけでなく、自己変容に無関心な群やメリットとデメリットの双方を予期する葛藤群が抽出された。

全体的に見て、中学生では自己変容に無関心な者、高校生では自己変容と現状維持の双方にデメリットを予期する回避—回避葛藤を持つ者、大学生・専門学校生では自己変容と現状維持にメリットを予期する接近—接近葛藤を持つ者が多かった。このような発達の变化は、自己変容の重要性の認識や内省の高まりによって促進されることが示唆された。

以上から、特に高校生において、変わることも今のままでもいることもデメリットがあるという葛藤があるために、変わりたいと望みつつも変容への一歩が踏み出しにくいことが示された。本研究の結果に基づいて、今後は自己変容を志向する青年への具体的支援の検討が必要とされる。

主要引用文献

- Kiecolt, K. J. (1994). Stress and the decision to change oneself: A theoretical model. *Social Psychology Quarterly*, 57, 49-63.
Polivy, J., & Herman, C. P. (2000). The false-hope syndrome: Unfulfilled expectations of self-change. *Current Directions in Psychological Science*, 9, 128-131.

Table1 自己変容の予期に伴う葛藤5群と学校段階のクロス集計表

	CL3 無関心群	CL2 現状維持 メリット予期群	CL4 回避— 回避葛藤群	CL1 自己変容 メリット予期群	CL5 接近— 接近葛藤群	合計
中学生	人数 割合 調整済み残差	77 6.9% 5.56	166 14.9% 4.15	72 6.5% -0.67	96 8.6% -3.53	497 44.6% -3.21
高校生	人数 割合 調整済み残差	17 1.5% -3.07	12 1.1% -4.05	126 11.3% 4.73	60 5.4% 1.42	272 24.4% -1.30
大学生・ 専門学校生	人数 割合 調整済み残差	24 2.2% -3.13	35 3.1% -0.70	92 8.3% -3.67	81 7.3% 2.48	345 31.0% 4.65
合計	人数 割合	127 11.4%	124 11.1%	384 34.5%	213 19.1%	1114 100.0%

注) 調整済み残差が1.96以上のものを太線で囲い、-1.96以下のものを破線で囲った。

注) 結果に基づいて各群を並び替えた。